

三ツ又を詠んだ俳句

『芭蕉・神山寸木連句碑』調査研究





芭蕉・神山寸木連句碑

## 連句碑に寄せて

黒野地区の歴史について地道な活動を続けている「黒野城と加藤貞泰公研究会」が、神山寸木の連句碑に取り組みました。

寸木の発句に芭蕉が脇句を付け、名古屋・岐阜の連衆が続けた表六句の存在は、俳文学においては知られています。寸木その人だけでなく連句を刻んだ句碑の存在も地元では必ずしも有名ではありません。

このたび研究会の皆さんは神山家の御子孫を訪ねて新たな資料を提供していただけたことに加えて、連句碑に並んで立つ和歌碑にも注目して拓本をとり、これまででなされていなかった解読もされました。今後は碑の保存についてもお考えとのこと伺い、うれしく思います。

建立後しばらくたった後には存在を忘れられていた碑が再びスポットをあび、地元の歴史遺産として継承されたいくことを願っています。

平成二十九年十一月吉日

犬山城白帝文庫 主任学芸員 笈真理子

## 三ツ又の俳句文化

江戸時代、折立村の支郷三ツ又は、大きな河川が合流する風土の地で、ここに住む庄屋神山吉正（俳号寸木）という俳人がいました。

松尾芭蕉が来濃した折、俳句に堪能な寸木は、芭蕉や荷兮（かけい）らとともに六連句を詠み、寸木は芭蕉の住む江戸武蔵野を発句で挨拶。芭蕉は三ツ又が武蔵野の三侯の景色と似ていると返しました。

子の正孝（俳号二春）は、芭蕉と父寸木が連句を詠んだことから、二春自身が多数の俳人などから三ツ又を詠んだ詩歌を収集してまとめ、その記念に句碑を建立しました。

句碑は後世に忘れ去られ、昭和時代に発見されて今日に至っています。

地域でも殆ど知られていないので、郷土歴史文化の発掘を目的に一年前から調査研究に取り組み、「黒野史誌」などに連句を詠んだ所は三ツ又説と芭蕉の旅宿の二説があり、改めて碑文解読などの作業を行いました。

これらの調査研究にて、江戸時代中頃に内外から多くの俳人が三ツ又を訪れ、四季や風土を題材にした句が多数詠まれたことが判明しました。また新発見の絵から当時の三ツ又の川筋も推測することもできました。そんな歴史文化があった三ツ又を紹介します。

平成二十九年十一月

黒野城と加藤貞泰公研究会

会長 河口 耕三

# 目 次

	一、三ツ又芭蕉の碑	3		五、芭蕉の旅宿・三光山妙照寺を訪ねて	22
	二、碑文調査			六、寸木は芭蕉と連句の21年前に俳人	23
	(一) 寸木・芭蕉の連句碑	4		七、二春の俳句	23
	(二) 連句碑(裏)の解説	5		八、三ツ又関連資料紹介	24
	(三) 連句碑(表)の解釈	7		九、三ツ又の地理今昔	26
	(四) 詠三川古和歌碑	8		(一) 川筋の変化	26
	(五) 調査に携わり	9		(二) 三ツ又の風情絵	26
	三、寸木・芭蕉の連句はどこで詠まれたか	10		(三) 板谷川は三ツ又村の南へ流れていた1	27
	(一) 碑文には三ツ又にて	10		(四) 板谷川は三ツ又村の南へ流れていた2	28
	(二) 三ツ又で詠まれたと神山家に伝わる	10		(五) 板谷川は三ツ又村の南へ流れていた3	29
	(三) 三ツ又に関する詩・歌・句の収集書	12		(六) 明治時代の河川	30
	(ア) 「百人一句」二春自序	13		(七) 現在の地形	31
	(イ) 三ツ又の地名変体仮名文字	14		(八) 妙照寺と三ツ又へのルート考察	31
	(ウ) 俳人らは何所から来たか	14		十、三ツ又の寸木・芭蕉関連年表	32
	(四) 「百人一句」に六連句の写	15		十一、書籍などに紹介されている連句碑	34
	(五) 「校本 芭蕉全集」第四巻連句編より	16		十二、句碑保存活動(台座補強工事)	35
	(六) 「新編 芭蕉大成」連句編より	17		十三、まとめ	36
	(七) 芭蕉・寸木の外に連句を詠んだ俳人	17		引用参考文献・資料	37
	(八) 「水月一双」に書かれていることは?	18		調査研究ご協力者	37
	(九) 岐阜の旅店で句を申されたる	19			
	(十) 岐阜の旅宿の詠	20			
	(十一) 連句は客発句・脇亭主の規則	20			
四、碑の発見経緯		21			





寸木・芭蕉の連句碑(左) 三川を詠んだ古和歌の碑(右)  
岐阜市折立三ツ又の地蔵寺跡境内 平成29年4月15日筆者撮影

## 一、三ツ又に芭蕉の碑

岐阜市折立の南東は三ツ又の地名で、江戸時代は、伊自良川（旦川・現新堀川）と板谷川（板屋川）が合流していたので三ツ又と名づけられた土地柄です。ここ地蔵寺跡境内に神山寸木と松尾芭蕉の連句碑が立っています。研究会は、連句碑の顕彰活動に取り組む目的で、碑文の調査を行いました。碑は円筒形の水成岩に彫られています。写真の左側が寸木と芭蕉の連句碑です。表には、寸木の発句と芭蕉の脇句が彫られています。

どこまでも武蔵野の月影涼し 寸木 (五七五の長句)

水相似たり三またの夏 芭蕉 (七七の短句)

芭蕉（四四歳）が美濃へ第二回来濃中の貞享五年（1688）六月十七日に詠まれました。  
寸木とは、俳名で三ツ又の庄屋、神山長四郎吉正です。裏面には寸木の長男

神山長四郎正孝（俳名二春）が、貞享五年から四八年後の元文元年（1736）に碑を建立し云われを記しています。

碑文を調査中に、「黒野史誌」（昭和六二年発行）掲載と碑文に数文字の違いが判明したので、改めて研究会では、拓本とりと写真撮影を行い、碑文解読を行いました。

また、写真右側の碑は、三ツ又に来遊した古和歌達人が「みつまた」を詠った碑です。二春が建立した連句碑から二十九年後の明和二年春（1765）、二春の子神山義正が建立。

碑は、昭和三四年九月に地蔵寺境内で発見されました。

地蔵寺は、浄土宗、神山家の氏寺である。地蔵寺跡南側などの土地は神山家の土地でしたが、子孫の神山忠司氏（七三歳）のお話では、父芳雄氏の代に市内に移住。現在、毎年八月十九日、地蔵堂の地蔵まつりを三ツ又の住民（奉賛会）が中心に行っています。



二、碑文調査

(一) 寸木・芭蕉の連句碑

表



裏



表

どこまでも武蔵野の月影涼し  
寸木  
水相似り三またの夏  
芭蕉

裏

貞享五林鐘十七日芭蕉翁来游  
于此家父寸木呈句尊翁即賜脇仍之  
予元文之初題三又之句及詩歌需遐邇而  
大成  
神山長四郎正孝俳名二春欽誌

貞享5年(1688)  
元文元年(1736)

連句碑写真

水成岩・寸法:高さ55cm(約2尺)、直径21cm(7寸)

表



裏



裏

貞享五林鐘十七日、芭蕉尊翁来遊于此家、  
父寸木呈句、尊翁即賜脇、  
仍拵元欠□初題三又之句及詩歌需遐□大戚  
神山長四郎正孝  
俳名 二春 欽誌

参考:『黒野史誌』(昭和62年発行)より  
赤字は、碑文との違い

連句碑拓本

## (二) 連句碑(裏)の解説

### 三ツ又の連句碑(裏)

貞享五年林鐘十七日芭蕉尊翁 来游

于此家父寸木呈句尊翁即賜脇仍之

予元文之初題三又之句及詩歌需遐邇而

大成 神山長四郎正孝俳名二春欽誌

### (訓読文)

貞享五年林鐘十七日、芭蕉尊翁 来<sub>二</sub>游<sub>ス</sub>

于此<sub>ニ</sub>家<sub>ニ</sub>、父寸木呈<sub>シ</sub>句<sub>ヲ</sub>、尊翁即<sub>チ</sub>賜<sub>レ</sub>脇<sub>ヲ</sub>。仍<sub>リ</sub>之<sub>ニ</sub>

予元文之初<sub>メ</sub>、題<sub>シ</sub>三又之句及<sub>ビ</sub>詩歌<sub>ト</sub>、需<sub>メ</sub>テ遐邇<sub>ニ</sub>而<sub>一</sub>

大<sub>ニ</sub>成<sub>ル</sub>。 神山長四郎正孝俳名二春欽<sub>ツツシ</sub>ンデ誌<sub>ス</sub>

### (読み下し文)

貞享五年林鐘十七日、芭蕉尊翁 此の家に来游す。

父寸木句を呈し、尊翁即ち脇を賜り。之に仍りて、

予、元文之初め、三又之句及び詩歌と題し、遐邇に需め

て大いに成る。

神山長四郎正孝俳名二春欽<sub>ツツシ</sub>ンデ誌<sub>ス</sub>

### (口語訳)

貞享五年(二六八八)陰曆六月十七日、芭蕉翁は、神山寸

木(神山長四郎吉正)の家にやって来て、俳諧を楽しまれた。父寸木が句を詠んで差し出すと、尊翁は即座に脇句を添えて

くださった。このことから、私は、元文の初め(一七三六)、

「三ツ又の俳句及び漢詩や和歌」と題して、芭蕉翁を慕う遠方ならびに近隣の者に寄稿の助けを得て、立派に出来上がった。

神山長四郎正孝俳名二春 欽<sub>ツツシ</sub>ンデ誌<sub>ス</sub>

(語釈)

\*貞享(じょうきょう)：和暦の貞享五年は一六八八年に当たる。

\*林鐘(りんしょう)：陰暦六月の別称。

\*尊翁(そんおう)：翁の尊称。

\*来游(らいゆう)：「遠くから旅してやって来る」という意味もあるが、ここは「やって来てあそぶ」の意とした。「あそぶ」は古くは詩歌や管弦をすることをい

った。  
\*于(音「ウ」)：補語の前に場所や方向、動作の起点などを示す助辞で、「動詞<sub>ニ</sub>于A<sub>一</sub>」の形で「Aに…す」のように「于」は直接読まない置き字とし、Aに送り仮名「ニ」を送って読む。

\*寸木：神山長四郎吉正の俳号。

\*呈(ていす)：差し出す。

\*即(すなはち)：「直ちに」「即座に」の意。

\*脇(わき)：脇句の意。「脇句」は、連歌、俳諧の付合(つけあい)で、発句の次に付ける七・七の句をいう。

\*仍(音「ジョウ」)訓「よる」「しばしば」「なほ」「よつて」等。

\*予：小さくなっているのは、編(へん)の部分の摩耗

欠落によるものではなく、自称「予」を、敢えて小さく記して謙称表現としたのである。

\*元文(げんぶん)之初：一七三六年に当たる。「元文」は和暦。

\*題(だいす)：テーマとする。

\*詩歌：日本語用法としては「しいか」と読むが、漢文だから、「しか」と読んでおく。ここでは「漢詩と和歌」の意。

\*需(もとム)：ここは、「待ち求める」「句稿の助けを求める」意とした。

\*遐邇(かじ)：遠方の者や近隣の者。「遐」は、訓「とおシ」。はるか。「邇」は「ちかシ」。

\*大成：立派にできあがったの意。

\*神山長四郎正孝：寸木の長男、俳名二春を号した。

\*欽誌：「つし欽んでしる誌す」敬意をこめてに書きしるすの意で、碑文などの結びの常套語。

〈訓読文〉〈語釈〉は、郷孝夫の記載による

二〇一九・三・二九

### (三) 連句碑(表)の解釈

一 どこまでも武蔵野の月影涼し 寸木

二 水相似り三またの夏 芭蕉

一夏(月涼し)。月。芭蕉に対する挨拶の意。  
二夏。この三侯が深川芭蕉庵付近の隅田川の三ツ股の景にも似ていると喜び、挨拶を返した。

『校本 芭蕉全集』第四巻 連句編(中) 43頁

寸木は、芭蕉が江戸深川の芭蕉庵の俳風を美濃へもち込んできたことを讃えた。芭蕉の至る所、新しい俳風の滲透風靡(しんとうふうび)すると讃えて、「よくいらつしやいました。」と、起句を詠んだ。

これに対して芭蕉は三ツ又も武蔵野もよく似ていると答えた。勿論似ているのは気候ではなくて、蕉風と通ずる美濃の俳風である。「こちらにも立派な処です」と答えたのである。

『黒野史誌』芭蕉の来濃 434頁

寸木の曾孫正伴も「翁の住める東路武蔵下総の境なる隅田川の下ッ流れ、深川の三ツ又といふ処にそありける。この流れ、名を同じうするより、思ひ寄りたるなるべし」と述べている。

(神山芳雄氏文書) 注記・芳雄氏は寸木子孫

『黒野史誌』芭蕉の来濃 436頁

碑の句を解釈するなれば、芭蕉さんを尊敬する寸木は芭蕉さんの前に手をつけて、武蔵野からはるばる旅をなさっている翁の俳諧は、月の如くあまねく照り輝いています。田舎の私などもその月影をしたっているのでございます。月と言うと俳諧では秋の季節のもので月涼しと夏の六月の月に預けて涼しと詠んで挨拶したのである。芭蕉は三ツ又の川の話聞き度、私の庵ある深川の通りですね。隅田川に流れ込む小名木川の合流する処に住んでますがよく似たお住居でしょう。と応じて付けたのである。

國島十雨ノート『三股芭蕉翁遊句碑について』(部分)

この句は芭蕉が旅を重ねて岐阜の片田舎までの風雅な旅を続けた折、師が市井の塵を避けて深川に住み涼爽な月光を見たと同じく、ここでも清爽にみちているという意味の句で、芭蕉を前にして尊敬と喜びを表したものである。

これに対し芭蕉は、いやいや私の住んでいる武蔵野の風物と似ているのは、単に月だけではない。この三ツ又の涼味もたらず水も似ていますよと脇を付け、寸木への挨拶とした。

岐阜市老人クラブ連合会「光」

投稿「芭蕉の句碑」(部分) 黒野 増田悦三

#### 詩心の交流(部分)

武蔵野の果まで照りわたる月光は、芭蕉の寓意でもあるのか。芭蕉は寸木の住む黒野三侯と芭蕉庵のある深川三侯との間の地形的類似性を指摘することによって、挨拶を返している。

『芭蕉と岐阜・大垣』24頁 大野国土著 まつお出版



(四) 詠三川古和歌碑 さんせん



裏 表  
古和歌碑写真

水成岩・寸法：高さ58cm（約2尺）、直径21cm（7寸）

古和歌達人来游此家三川詠多今明和二  
春正四位上武喬四季撰 神山義正欽誌

裏

深き色をミつまた河の水の面みとりあやなす春の柳かな  
（ほととぎす）  
子規松の靡隅友とミつ又そ□えり千世をうれしく  
何□やミ川またれし月も波の上に光りほのめく河隈の里  
（かわくま）  
河波も氷にむせふ夜を寒ミつまた川ねてや千鳥鳴覧  
（ちん）

武喬 可圓 専春 有一

表

三ツ又の川にちなんだ四季、自然、植物、鳥などを題材にした和歌四選。

かつて和歌の達人が三ツ又の神山家にやって来て、ミつまたの三川について多数の和歌を詠んだ。明和二年（1765）春に位の高い正四位上（しょうしいのじょう）の武喬（ぶきょう）が四季の和歌を撰ぶ。神山義正謹んで誌す。

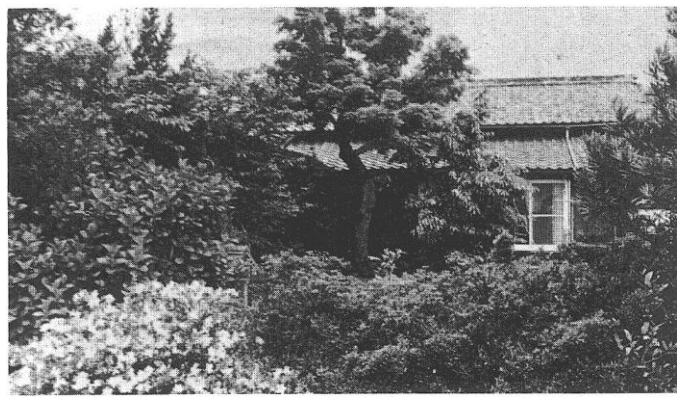
（義正は寸木の孫、二春の子で、明和二年は、二春が建立した連句碑から二十九年後になる。）



裏 表  
古和歌碑拓本



平成18年(2006)12月30日



昭和50年頃(1975)

浄土宗岐阜教区「教区誌」の地蔵寺より

## 地蔵寺の今昔



現在の地蔵寺跡

平成29年(2017) 10月3日筆者撮影

### 解説作業



右側碑の解説  
平成29年7月27日



拓本作業 平成29年4月3日

## (五) 調査に携わり

芭蕉の句碑は、岐阜県下に多数存在していますが、ここ三ツ又の句碑は、建立年代が刻まれている中で最も時代が古いようです。

今から三三〇年前の江戸時代に三ツ又の寸木が芭蕉と共に三ツ又を題材にした句を詠まれたことに、当時のこの地域の歴史文化が偲ばれます。

碑文調査では、句碑に刻まれている文面に限っての調査報告としました。

どこで詠まれたかについては、三ツ又と芭蕉旅宿の二説があることが分かりました。

また俳句と関係が深い三ツ又の河川について調査研究の成果を引き続き報告します。

### 碑文調査者

黒野城と加藤貞泰公研究会

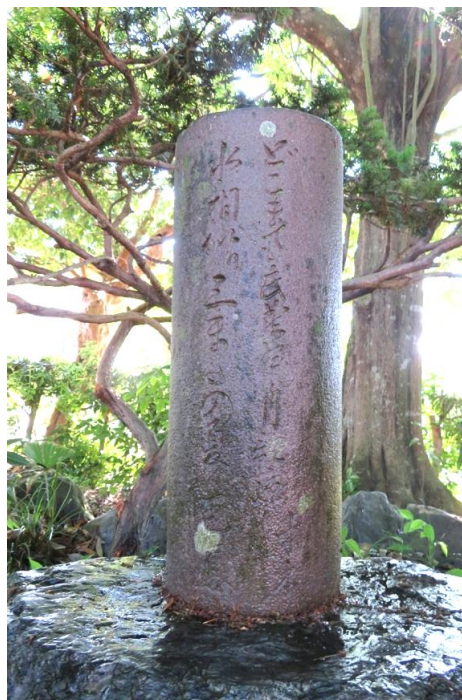
拓本指導・左側碑文解説  
右側碑文解説

三ツ又関係資料収集  
撮影・編集

郷 孝夫  
國島 京子  
神山 順子  
河口 耕三



どこまでも武蔵野の月影涼し 寸木  
水相似たり三またの夏 芭蕉



### 三、寸木・芭蕉の連句はどこで詠まれたか

三ツ又の風情を詠んだ寸木と芭蕉の連句は、芭蕉が美濃へ第二回来濃中の貞享五年（1688）六月十七日に六名の俳人にて六連句が詠まれており、碑文はその発句と脇句です。

碑文には、寸木の長男神山長四郎正孝（俳名二春）が、貞享五年から四八年後の元文元年（1736）に碑を建立し云われを記しています。

碑文の解読は、前項にまとめておりますが、この連句は旅店（旅宿）で詠まれたとする史料があるため、関係史料を整理してみました。

#### （一）碑文には三ツ又にて

「連句碑（裏）の解読」（郷孝夫氏）より

（原文）

貞享五年林鐘十七日芭蕉翁来遊

于此家父寸木呈句尊翁即賜脇仍之

予・・・・・

（詠み下し文）

貞享五年林鐘十七日、芭蕉尊翁此の家に来遊す。

父寸木句を呈し、尊翁則ち脇を賜り。之に仍りて、予・

・・・・・

（口語訳）

貞享五年陰暦六月十七日、芭蕉翁は、神山寸木の家やつて来て、俳諧を楽しんだ。父寸僕が句を詠んで差し出すと、尊翁は即座に脇句を添えて下さった。・・・

碑文には、芭蕉が三ツ又の寸木の屋敷へ来て俳句を詠んだと記している。

#### （二）三ツ又で詠まれたと神山家に伝わる

●神山寸木 『黒野史誌』より

芭蕉の来濃を岐阜の旅宿まで神山寸木が尋ねていったか、芭蕉が足をのぼして三ツ又の神山寸木の屋敷を訪ねたかは、明らかになつていないが、子の神山二春が記した句碑には「芭蕉尊翁来遊于此家」とあり、三ツ又を訪ねたと記している。

この碑は元文一年（1736）建立というから、芭蕉来濃の貞

享五年から四八年を経過している。しかし神山家にとって、芭蕉が家まで訪ねてきたか否かは、重大問題であるので、約50年後の子の覚書は先ず誤りなからうと思う。

神山家では三ツ又を芭蕉が来遊したことをずっと伝えていたもので、二春の孫正伴が明和三年（1766）、祖父二春の二七回忌の法要の手向け詠草集の始めにも、

「西濃北濃の河筋ひとしく落あひて、南に流るる水のちまた三つに分かれたれば、三ツまたとなむ呼ぶところに、家居せられける神山氏吉正、風雅に志深くして歌枕の旅客などあまた訪ね来る中に、貞享のころほひ武蔵の国より芭蕉といへる翁来りて遊べる事侍りし」（神山芳雄氏文書）

とある。明和三年は貞享五年（1688）から七八年経っている。三ツ又の神山長四郎の家は、代々庄屋を勤めていて、長四郎を名乗り、芭蕉に面談した長四郎は諱（いみな）を吉正といい、寸木と號した。芭蕉が江戸深川の三ツ又に住んでいたもので、この三ツ又と同名なため、三ツ物に詠みこまれたのであろう。寸木の曾孫正伴も、「翁の住める東路武蔵下総の境なる隅田川の下つ流れ、深川の三ツ又といふ処にそありける。こここの流れ、名を同じうするより、思ひ寄りたるなるべし」（神山芳雄氏文書）と述べている。

神山長四郎吉正（寸木）は元禄八年（1695）三月に死去し、その子長四郎正孝が継いだ。正孝は二春と号し、父寸木をうけついで俳諧を趣味とした。三ツ又に関する詩・歌・句三巻を編輯して家蔵にした。この正孝は元文五年（1740）十一月死去した。

『黒野史誌』435・436頁

### ●神山二春の法要

寸木の子神山二春正孝が死去して二七回忌を、孫の長四郎正伴が明和三年（1766）に催した。その折、寸木と芭蕉が三ツ又を詠んでいたのを思い出し、水にちなんだ句を集めて手向けた。この句の中には当地域の人々もあるう。

『黒野史誌』437頁

### ●神山家その後

神山家は、四代に亘り長四郎を名乗る。

元禄五年（1692） 神山長四郎吉正 俳号寸木  
宝永三年（1706） 神山長四郎正孝 俳号二春  
天明二年（1782） 文化十二年（1815） 神山長四郎正津  
文化三年（1806） 同十五年（1818） 神山長四郎正道

『黒野史誌』村の庄屋の人々 307頁

二春の孫正伴以後は、俳諧に疎遠であったのか、碑は神山家の氏寺である地藏寺境内に埋もれたままとなり、昭和時代の発見まで忘れられた存在であったようである。

### ●地藏寺

神山家の氏寺地藏寺は、庄屋長四郎が田一町二反をつけて尼僧を置き祖先をとむらった。安永七年（1778）祖先及び父母の菩提のため一字を建立。武儀郡津保谷より引堂し天保八年（1837）建て替えた。尾張中一色円成寺末であったが、明治三二年（1899）知恩院の末寺となり、明治三三年地藏寺と称した。尚、神山家の本寺は代々折立の超勝寺である。

『教区誌』浄土宗岐阜教区 地藏寺31頁  
『黒野史誌』地藏寺1297頁

### ●子孫のお話

今回の調査にて、寸木の子孫神山忠司さんは、数十年前に父芳雄から「芭蕉が泊まった」と聞いていたと話されました。

(三) 三ツ又に関する詩・歌・句の収集書

寸木の子正孝(二春)自叙『百人一句』より

神山忠司氏蔵

今回の調査で、新発見の文書が見つかりました。

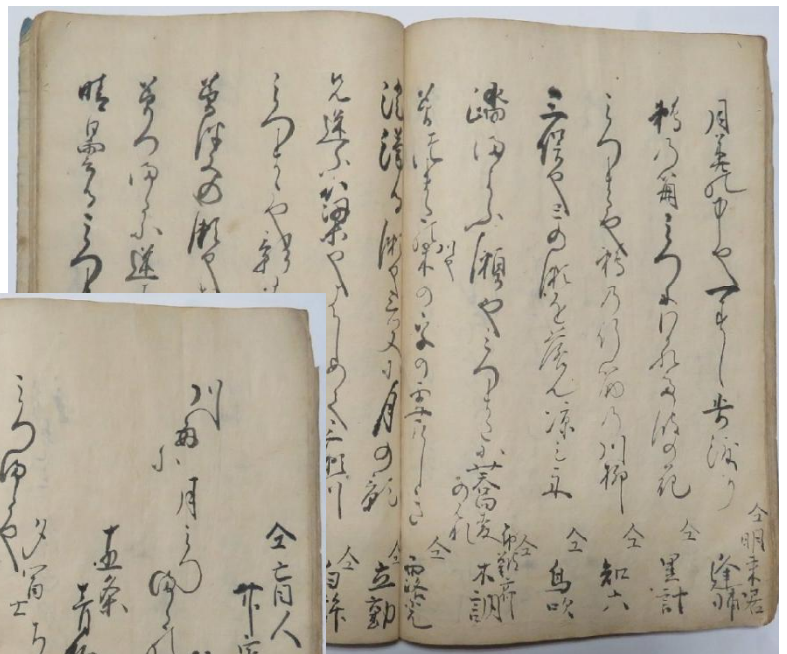
文書名は表紙が破損して外題が解らないので、ここでは内題の「百人一句」を外題としました。

この書は、連句碑の裏に記している元文の初め(1736)二春自身が多数の俳人や歌人から収集してまとめた三ツ又の句及び詩歌の一冊と思われます。

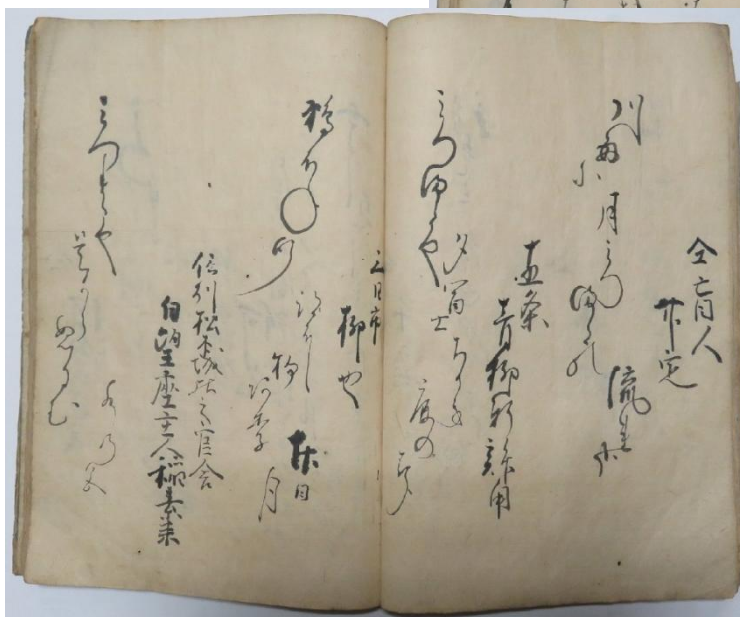
開くと「本家も」に次いで絵図が綴じられています。絵図には、三本の川と三ツ又の村らしき家並み、川で篝火を焚いて鵜で漁をする人、鵜舟の情景が描かれています。

初めに寸木の子二春の自叙が記されています。続いて黒野はもとより近郊、濃州外約130名の俳人らの作品が100頁にわたり200点が採録されています。大半が俳句で漢詩も採録されています。二春が俳人に呼びかけ収集したと思われます。

本書は、元禄八年(1695)寸木没後、元文元年(1736)の間に収集した作品のようで、四年後の元文五年(1740)に二春は死去しています。



『百人一句』事例  
神山忠司氏蔵







『百人一句』二春自序 神山忠司氏蔵

(ア) 『百人一句』 二春自叙

百人一句

⑩

吾か郷を三またと号たるハ、三の字  
をたつきまたといひてひともしの

ことなり、みつの川乃水音涼風の

声までもみな和歌のすかたならずや

夕にはかすみをあわれひ、且にハ露

をかなしふ心のみふかし、独くまゝに

蛩をともして、古き句を度々詠ス、

いとさうしく、世を思ひ居る

ところここかしこ風雅のとち

所の名を題して施頭混本の

さま、或ハ水辺の模様詞花言葉

せうと、このはしに記し送られ

けり、またハ梅に鳴くうくいす、月に轉

ほととぎす、鹿の音鳩のこゑ迄も

くみ、句の数百句に満り。しかるを

いま是百人一句と名附るになんありけり、

中にも貞享のすえ父寸木蕉翁二

対して饗応の一句をいふにとこまでも

むさし野の月影涼し、翁のいわく我が

古郷の三侯も流三すしに分れ

今の爰にひとしといとなつかくしく

思はれけるにや、脇のさまかく言れ

けり

二春自序

(芭蕉)

はせを

水相似たり三またの夏

(イ)三ツ又の地名変体仮名文字

『百人一句』に記載の「みつまた」の当て字が俳人に  
より多彩に表現されているので紹介します。

地名	記載数	備考
みつまた	3	
みつまた	61	最も多い
みつ又	2	
みつ満た	2	
ミ津また	2	
三俣	17	元禄郷帳記載の村名
三つまた	3	
三つ又	1	
三つ満た	1	
三つ満多	1	
三ツ又	2	現在の地名（住所は岐阜市折立）
三ツ満た	1	
三ツ満多	1	
三また	4	
三また	3	
三津また	1	
三津又	1	
三川また	3	
美つまた	1	
美つまた	1	
美ツ又	4	
美津また	10	

「宝永2年（一七〇五）以前以後堤色分絵  
図」天保（一八三〇）〜安政（一八六〇）年間に記載の村名

(ウ)俳人らは何所から来たか

地名	人数	備考
美津ま多	1	
美津又	2	
美津満た	3	
美津満多	1	
美川また	2	
見つ又	1	
以上28種類		
百人一句	9名	
加納士（加納藩士）	9名	
勢州山田	4	
岐阜	17	
尾州名古屋	14	
京	2	
笠松	2	
北野	4	
北方	4	
美江驛	5	
十五条	1	
三田市	1	
信州松本城此之官舎	2	
江州中野	4	
則松	3	
黒野	11	
折立	4	
不明	6	
百人一句追加		
竹鼻	1	
笠松	2	
長ら	6	
ぎふ	1	
尾州名古屋・なごや	12	
早	1	
黒野	1	
則松	2	
関	2	
下西江	1	
勢州山田	1	
長良	1	
漢詩		
武州久山	1	
西山草堂	1	
岩滝	1	
濃陽梅原	1	
黄山下	3	
祥山下	1	
尾州	1	
濃陽跡部	1	
江戸	1	
奥州	1	
加州	1	
豊後三顧軒	1	
黒野	1	

(四) 『百人一句』に六連句の写

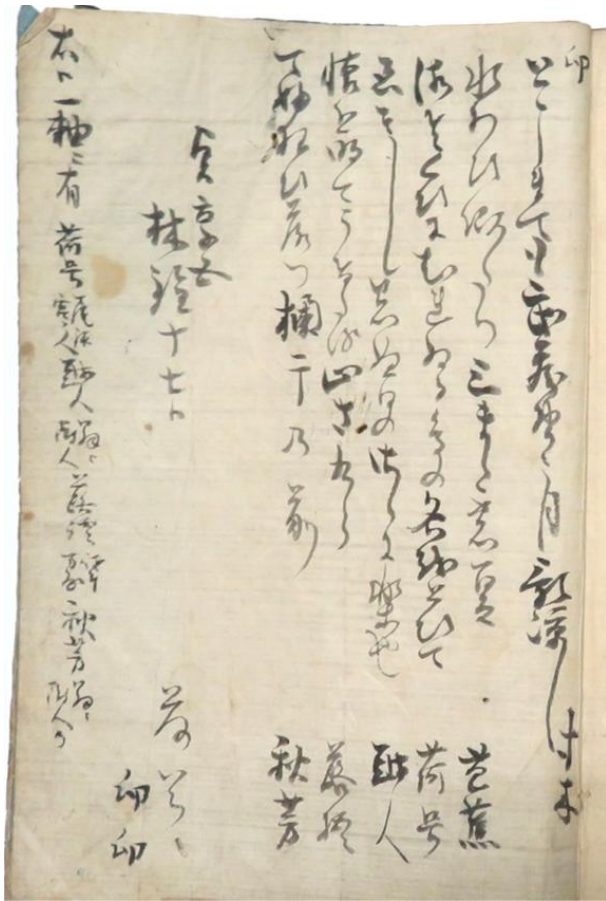
荷兮が連句を記録

寸木の子正孝(二春)自叙『百人一句』より

神山忠司氏蔵

『百人一句』の最終頁に、六連句と貞享五年林鐘十七日、これを記録した芭蕉の弟子荷兮のサイン。荷兮は三句目を詠んでいる俳人。

この書は、軸(巻物)からの写しのようにであるが、最も原文に近い史料である。二句目以降はひらがな文字も多く、後の碑文や写しに見られる漢字変換文と違って新鮮さを感じる。



六連句の写し『百人一句』より  
神山忠司氏蔵

印

とこまでも武蔵野の月影涼し

寸木

水あひ似たり三またの夏

芭蕉

海老くひにむれゐる鳥の名をとひて

荷号(兮)

急ほし着ぬ日のさらに楽也

越人

懐を明てうけたる山さくら

落梧

てふ狂ひ落つ欄干乃前

秋芳

貞享五

林鐘十七日

荷兮

印

右ハ一軸ニ有荷兮 尾州客人 越人翁の附人 落梧 岐阜万屋 秋芳翁ニ附人

この書は、一軸(巻物)に有とあるが、次頁の「水月一雙」に書かれている「消日の俳諧」が軸の名称のようである。なお現在、「消日の俳諧」、軸の行方は不明である。

(五)『校本 芭蕉全集』第四卷 連句編(中)より

寛政六年(1794)の書「水月一雙」によれば、桂花楼主人看古が三俣の里に寸木の後裔を訪ねたら、芭蕉らがそこに来合わせた折の「消日の俳諧」(面六句、荷兮筆)があつたので写した。と出所が書かれている。

『水月一雙』(寛政六年)の士朗の序によれば、桂花楼主人看古が美濃の三俣の里に、寸木の後裔を尋ねたところ、かつて芭蕉が荷兮・越人らと共にそこに来合せた折の「消日の俳諧」(面六句也、貞享五年林鐘十七日荷兮筆)があつたので、それを写したものととして巻頭に掲げ、それに士朗・俗青・看古・桂五ら一派の連中が裏以下を継いで一歌仙としている。これによつて、六月十七日の興行と知られる。ただし支考の『国の華』(宝永元年)には、発句に「挨拶」と前書あり、第三までを収め、「是は三俣のあるじ、芭蕉翁を岐阜の旅店にたづねて、此句を申されたるに、深川の古郷を思ひ出給ふなるべし」と付記している。

一五六 どこまでも(表六句)

一 どこまでも武藏野の月影涼し 寸木

二 水相にたり三またの夏 芭蕉

三 海老喰ひにむれる鳥の名を問て 荷兮

四 ゑぼし着ぬ日のさらに樂也 越人

五 懷を明てうけたる山ざくら 落梧

六 蝶狂ひ落欄干のまへ 秋芳

(水月一雙)

- 一 夏(月涼し)。月。芭蕉に対する挨拶の意。
- 二 夏。この三俣が深川芭蕉庵付近の隅田川の三つ股の景にも似ていると喜び、挨拶を返した。
- 三 6群ある魚の「幽」。群たる鳥の「一・珍」。
- 四 うちくつろいださま。
- 五 春(山桜)。散りかかる落花をふところを開けて受ける長閑な一景。7岐阜本町の商、安川助右衛門。この夏、稲葉山の亭に芭蕉を招いた。
- 六 春(蝶)。8くるひゆく「一・珍」。9岐阜の秋芳軒宜白か。

(六) 『新編 芭蕉大成』連句編より

「ここに此翁の荷兮・超人等を具せられたる消日の俳諧有（「面六句也。貞享五年林鐘十七日、荷兮筆」）われうつし持ぬ」として提出。と出所が書かれている。

「新編 芭蕉大成」 連句編219頁 三省堂

底 本一水月一双

【参考】一国の花(国)・俳諧一葉集

(一)

一 どこまでも武蔵野の月影涼し 寸木

二 水相似たり三股の夏 芭蕉

三 海老喰ひに群れる鳥の名を問て 荷兮

四 烏帽子着ぬ日のさらに楽也 越人

五 懐を明て受けたる山桜 落梧

六 蝶狂ひ落欄干の前 秋芳

○底本、序文に「こゝに此翁の荷兮・超人等を具せられたる消日の俳諧有 面六句也。貞享五年林鐘十七日、荷兮筆。われう

つし持ぬ」として掲出。○(国)に「挨拶」として第

三まで掲出。○(一)に「林鐘十七日」と端書。○

むれるる一群たる(一)○狂ひ落くるひゆく(一)

(七) 芭蕉・寸木の他に連句を詠んだ俳人

荷兮

山本荷兮(かけい)慶安元年(1648)〜享保元年(1716)没六九歳。

江戸前・中期の俳人・医師。名古屋の人。

名は周知。芭蕉門下で俳諧七部集のうち三部集を編む。のち蕉風を離れ、晩年は恋歌に転じた。

越人

越智越人(おちえつじん)明暦二年(1656)〜享保二十一年(1736)没八一歳。

号に負山子・槿花翁。名古屋に出て岡田野水の世話で紺屋を営み、坪井杜国・山本荷兮と交わる。

松尾芭蕉の「更科紀行」の旅に同行。各務支考と論争した。蕉門十哲の一人。

落梧

安川落梧(らくご)承応元年(1652)〜元禄四年(1691)五月没四十歳。

江戸時代前期の俳人。美濃岐阜本町の呉服商。貞享五年岐阜に師松尾芭蕉をまねき、滞在中の世話をした。

能書家としても知られた。「瓜島集」(各務支考「笈日記」に採録)編集の途中死去。

通称は万屋助右衛門。

秋芳

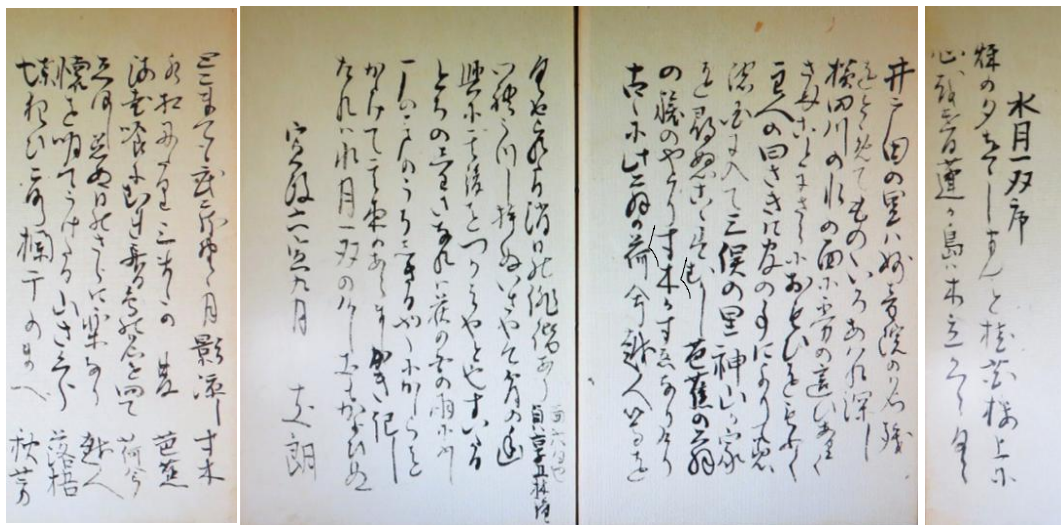
己百(きはく)、秋芳軒、宜白とも称した。元禄十一年(1698)十一月一日没五五歳。

後の日蓮宗三光山妙照寺第七世日賢上人。芭蕉と同年生まれ。



(八)「水月一双」に書かれているとは？

「水月一双」は『国書総目録 第五卷』昭和四二年発行に写が愛知学芸、版が天理綿屋。また『俳諧雑録』水月一双序士朗編（書写年不明・中村俊定文庫）が早稲田大学図書館の古典籍総合データベースに収録されている。寛政六年（1794）は、芭蕉と連句を詠んでから106年後である。桂花楼主人が公用のついでに三股の里を訪ね、芭蕉の旅の宿となった寸木の末裔の家に芭蕉、荷兮、越人らの名が見られる「消日の俳諧」面六句があるのを写して持ち帰った。それに続けて士朗らが連句を詠んだ。



「水月一双序」の写し 寛政六年九月 士朗編  
早稲田大学図書館 古典籍総合データベース『俳諧雑録』より

水月一双序

秋の夕をしまんと桂花桜上に  
心を遣る蓬か島ハ木立くらく  
井戸田の里ハ妙音院の名残  
をとめてものゝいろあハれ深し  
横田川の水の面に霧の這ひありく  
さまことにさらにおもひをもふく  
主人の曰さきに官の事によりて美  
濃国に入て三俣の里神山か家  
を尋ぬこゝそむかし芭蕉の翁  
の旅のやとり寸木かすゑなりけり  
こゝに此翁の荷兮越人等を  
具せられたる消日の俳諧あり  
つれうつし持ぬいさや今宵の幽  
興に其後をつかはやと也すいたる  
とちのしわさなれハ萩の花の雨にふし  
雁の声のうちしきるやうにかしらを  
かたけて其夜のあらましかき記し  
たれハ水月一双のけしきもかよひぬ  
(1794)

寛政六寅九月 士朗

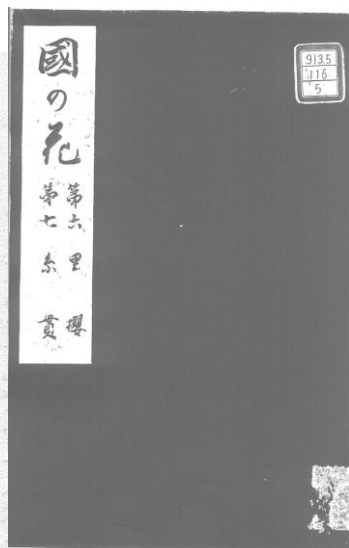
とこまでも武蔵野の月影涼し  
水相にたり三またの夏  
海老喰にむれ居る鳥の名を問て  
急ほし着ぬ日のさらに樂也  
懐を明てうけたる山さくら  
蝶狂ひ落欄干のまへ

寸木  
芭蕉  
荷兮  
越人  
落梧  
秋芳

解説：國島京子

(九) 岐阜の旅店で句を申されたる

芭蕉二世 各務支考『國の花』より



『國の花』(表紙)  
岐阜県図書館蔵

挨<sup>8</sup> 拶

どこまでも武蔵野の月影涼し 寸木  
水<sup>相</sup>あひ似たり三<sup>みつ</sup>またの夏 芭蕉  
海<sup>え</sup>老<sup>び</sup>くひにむれる鳥の名をとひて 荷兮

是は三侯の何がし、芭蕉翁を岐  
阜の旅店にたづねて此<sup>この</sup>句申され  
たるに、深川の古郷を思ひ出<sup>いで</sup>給  
ふなるべし。

『國の花』(部分)

『蕉門俳諧集二 古典俳文学大系7』488頁

各務支考は、貞享五年七月に連句が詠まれた二年後の元禄三年(1690)に近江で芭蕉に入門している。元禄七年(1694)、芭蕉の臨終を看取り、芭蕉三回忌を営み、芭蕉二世として美濃派をおこした道統で蕉門十哲の一人である。

宝永元年(1704)に各務支考の発起で『國の花』十二巻が刊行された。同書巻六「里桜」は、如冉(じよぜん)の撰である。如冉は黒野の人である。

この書には寸木と芭蕉、荷兮の三句を紹介している。発句の前に「挨拶」と前書きがあり、第三までを収め、「是は三侯の何がし、芭蕉翁を岐阜の旅店にたづねて此句申されたるに深川の古郷を思ひ出給ふなるべし」と付記している。

この書は、寸木・芭蕉らが連句を詠んでから、十六年後の刊行であり、年代が最も近い史料である。

前頁紹介の『芭蕉全集』や『芭蕉大成』にも、『國の花』を引用している。

また、『國の花』には、連句碑を建てた寸木の子二春の四句も採録(後頁紹介)されている。寸木の子二春は如冉を中心とする黒野連衆七人の一人であった。

8 挨拶 この作品は元禄元年六月十七日、芭蕉が岐阜滞在中のもの。

## (十) 岐阜の旅宿の詠

「この連句は岐阜の旅宿の詠である」(國島十雨談)

『黒野史誌』 434頁

### ○ 旅宿とは

各務支考『國の華』には岐阜の旅宿と書かれています。が、旅宿とはどこであるでしょうか。辞書では旅宿と同じ語です。

貞享五年六月八日に芭蕉は第二回の来訪で、名古屋へ移る七月二日までの一ヶ月間は岐阜の妙照寺に滞在していました。

連句を詠んだ六月十七日は、この期間内であるので寸木は妙照寺に芭蕉を訪ねていたと考えられます。國島十雨は、妙照寺で連句が詠われたとしています。



三光山妙照寺 岐阜市梶川町14番地



妙照寺庫裏「芭蕉の間」

妙照寺パンフレット『當山の概略』より  
12畳の座敷は当時のまま保存されている

## (十一) 連句は客発句、脇亭主の規則

今回の調査で、獅子門第三九世國島十雨自筆ノート『三俣芭蕉翁遊句碑について』のコピーが見つかりました。その一部を紹介。(國島京子氏解説)

この中で、どこまでも表六句(連句)について、表六句で終わるものでは本当でなくて、連句はむかしは百韻と云って、ずっと百句詠み続けるもの。又、五十韻といひ五十句続けるもの、歌仙と言って三十六句続ける形式のものなど、いろいろあったのである。表六句の型のもものは歌仙式、二十八宿、箴、半歌仙、歌仙首座、六句表の六色しかない。

だから表六句で終わっている(六句表)の型の連句である。三又の地藏寺の連句は二句だけ記されているから発句(ホッ句)、脇句(ワキ句)だけが記された碑である。このような発句、脇だけの碑は處どころにあるが、三又の場合には、3の「海老喰ひにむれたる鳥の名を聞いて」荷兮以下、越人、落梧、秋芳の四人の句、付け句が消略されたものであること承知されたい。

そして「連句にはルールがある。ゴルフ、野球、ゲートボールなどにもルールがあるが、文学である連句にも式目の名でルールがある。決った手法があるから面白いのである。

さて芭蕉という俳諧の大家の作品が三ツ又の里に存在することは文化的に見て素晴らしい事である。

私はこのような句を残して下さった神山寸木と言う先輩がある事を誇りとすると共に、この地の人々も誇りとして貰いたいと思うのである。ここで皆さんが一番興味を持

たれることは、芭蕉さんが黒野の三又の里に来たかどうかと云うことであろう。その事は芭蕉を祖とし各務支考を始祖とす美濃派獅子門としても一つの歴史に関することである。しかも第三九世と続いている俳人國島十雨としても重要なことである。だが歴史は正しい史実の裏付けがなければ歴史とは言えない。江戸時代に沢山の家系図が家々に作られて残っている様なものであつてはならない。

〔水月一隻〕の連句はなかなか味のある作品であり三又の碑のかげに隠れて知られない事は惜しい事であると思う。

連句は今日でも、客発句、脇亭主のルールは守られている。だから寸木が岐阜の芭蕉の旅舎を訪れて挨拶の発句を詠み、芭蕉の翁が亭主として、水相にたり三またの里、と脇句を詠んでいる事実は俳諧の規則、ルールの通りであり、三ツ又来訪の芭蕉を迎えたならば神山寸木は亭主として芭蕉の発句に脇句歓迎の意の付け句でなければならぬわけである。

碑の句を解釈するなれば、芭蕉さんを尊敬する寸木は芭蕉さんの前に手をつけて、武蔵野からはるばる旅をなさっている翁の俳諧は、月の如くあまねく照り輝いています。田舎の私などもその月影をしたっているのでございます。月と言うと俳諧では秋の季節のもので月涼しと夏の六月の月に預けて涼しと詠んで挨拶したのであろう。芭蕉は三ツ又の川の話聞き丁度、私の庵のある深川の通りです。隅田川に流れ込む小名木川の合流する処に住んでますがよく似たお住居でしょう。と応じて付けたのである。

國島十雨メモ『三侯芭蕉翁遊句碑について』

#### 四、碑の発見経緯

●昭和三四年九月伊勢湾台風の折り、婦人会員は、三ツ又の中央に昔からある寺蔵堂の境内に倒れた木の整理に出た。境内の裏手には、昔の墓地らしい一画があつて丸い石、円筒形の石、三角形の屋根の形をした石などがゴロゴロころがっていた。そのうちの二つの円筒形の石に句が幾つか書いてあつたので、そつとなでみた。一番下に芭蕉と刻んである。後日そのことを心ある方々に話し、数年後皆さんの手で句碑が立てられ、三ツ又にその存在を知れる様になった。これもこの時代の忘れられない出来事の一つである。

『くろの女』190頁（心のふれあいをもとめて）

三ツ又生活改善グループ

●もともとは地藏寺の墓地の中に存在していたのを、村の方が発見されたのであつた。神山直一翁夫人の言葉もあり、誰がその発見者であるかは明らかではないが、獅子門にその話を持ち込んで来たのは映月氏である。

昭和三六年か三七年頃のことである。先に記した通の墓地の中に在つて、今日のように岩組の台地などは勿論なかった。この台地は獅子門と岐阜市との交渉により成る台地で、時の市長がこの寺の近くの柿ヶ瀬、松尾五策氏だったから、交渉が纏まり台地が整備されたものであることを、記して置く必要がある。獅子門の宗匠である十雨が確認の為めその事実を証すこととした。

國島十雨ノート『三侯芭蕉翁遊句碑について』

●連句碑はその後忘却されていたが、昭和三〇年代以哉派の神山映月が発見、昭和三九年四月武藤景行が確認、周知に努め、台座建立に至つた。



当時、句碑は建っていた。但し台座は無かった。『俳日記』昭和四十年（1965）一月十七日の條に、景行は各務虎雄が連句碑台座の責任者として快諾されたとあり、二月十日松尾市長から台座建立のため十万円補助を承諾され、五月五日台座竣工式が催されたとある。

『黒野史誌』438頁

●國島十雨ノートに「神山直一翁夫人の言葉もあり」と書かれており、今回の調査で聞き取りしたところ、直一婦人の千穂さんが地蔵寺境内を片付けていたとき発見したのが最初であると、直一実家の与志子さん（八九歳）が語った。千穂さんの子三人も母からするように聞いていたという。発見場所は、現在の碑が立つ北西あたりという。墓の中から見つけたのではないと言われた。おそらく発見後に、俳句を嗜む神山耕一氏（俳号映月）に知らされたと思われる。

神山順子・筆者聞き取り調査



碑の傍に安永2年  
(1773) 神山長四郎  
正伴建立の灯籠

○神山家にとって、先祖が建立した寸木・芭蕉句碑は、もともと神山家屋敷内あるいは地蔵寺内に立てられたと思われるが、江戸時代末頃から忘れられた存在になったようでありませぬ。

碑の発見を機に、現代の世間に知れ渡るようになった。

## 五、芭蕉の旅宿・三光山妙照寺を訪ねて

金華山の麓、日蓮宗三光山妙照寺を訪ね、寸木が訪れた痕跡を探しに研究会員の皆さんなどと訪問しました。住職のお庫裏さん京子氏は、黒野の郷和彦氏と従妹関係でもあり、第三十世堀智仙住職から寺歴や芭蕉のお話を伺うことができました。

寺院敷地の以前は、竹中半兵衛の屋敷跡と伝える。慶長五年（1600）に岐阜中納言織田秀信より現在地を寄進され今泉村から移転している。

芭蕉がこの寺を訪れたのは、貞享五年（1688）六月八日である。（九月に元禄と改元）

後に當山の住職となった日賢上人は、号を「己百」といい、「秋芳軒」「宜白」とも称した。芭蕉とは同年齢で俳諧を通じて親交が深く、その縁で一ヶ月間滞在したと云う。その間、当地の有力者や俳諧・風流人に招かれて数多くの名句を残している。「やどりせむ あかざの杖に なる日まで」の句は、妙照寺に到着の時に詠んだ挨拶の句と伝える。

芭蕉が到着して九日後の六月十七日に寸木らとの連句を三ツ又あるいは旅宿（妙照寺）で詠まれたことになるが、その記録はない。

私たちは、今から約三三〇年前に芭蕉に面会した人々や寸木が訪れたと思われる「芭蕉の間」にて、全国でも数少ない芭蕉自筆本「奥の細道」複製の拝見や、あかざの杖を手に取り往時を偲んだ。



「芭蕉の間」平成29年4月27日筆者撮影



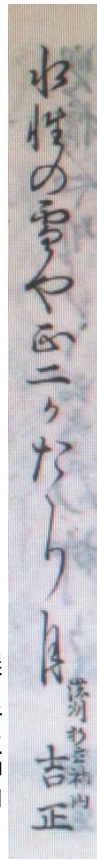
## 六、寸木は芭蕉と連句の21年前に俳人

寸木の句は、芭蕉との連句以外は不明であったが、史料（刊本）に掲載の二句が調査で判明した。

○今栄蔵編『貞門談林俳人大観』（中央大学発行）の寛文七年（1667）九月刊『玉海集追加』に濃州折立神山吉正の名があり。

この年代は、芭蕉と連句を詠んだ貞享五年（1688）から二十一年も前になり、吉正（寸木）は長きにわたり俳人であったことが確認できる。

○安原貞室編『玉海集追加』寛文七年刊 春之部 春雪に収録（写し） 早稲田大学図書館古典籍総合データベース



水性の雪や正二かたくり月

濃州折立神山

吉正

○『蕉門俳諧集二 古典俳文学大系7』「後の旅」に寸木の一句あり。

「後の旅」は、芭蕉百ヶ日追善のため編んだ集。元禄八年（1695）刊。「百ヶ日悼句の数に入ばやとの」に収録。

94 二親おやのきれほど梅うめに悔けり 寸木

94 二親のきれ 両親との離別の意か。

## 七、二春の俳句

○各務支考『國の華』に寸木の子二春の四句が収載。『蕉門俳諧集二 古典俳文学大系7』、『黒野史誌』

三 俣 二 春

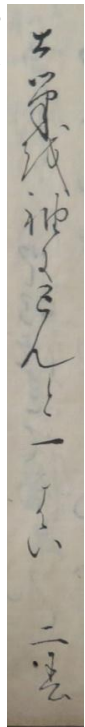
白雪にうすくとよし暮の鶴  
松の葉の雪は白髪に似たるもの  
とらまへばうそはゆからふみそさどる  
くもらふか風にならふか秋の暮

○二春自序『百人一句』自筆の四句を紹介。



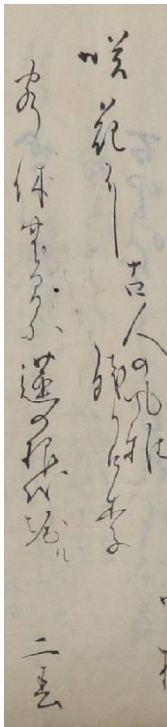
民の竈は早麦のなか

二春



土筆を袖にどんと一はい

二春



咲花に古人の風雅残りけり

客休む間に蓮の根を掘ル

二春

# ふるさと黒野

第六白寿会 国島五作

(一)遺族の許可を得て「くろの白寿」連載記事より抜粋)

## 三ツ又

岐阜県の最南端、木曾、長良、揖斐の三川が合流する千本松原の地形、環境は、まさに黒野の伊自良、鳥羽、板屋の三川が合流していた三ツ又の里と規模は小さいがあまりにも良く似ている所ではなかったかと時々思うところがある。

立

三ツ又は、方県郡下掛村(今の折立)の出村としてこの三川の合流点に十二、三戸の農家が肩を寄せ合うように張り付いて生活をしていた。これが三ツ又の地名にもなったのである。

この地には、芭蕉が訪ねて庄屋 神山長七郎(寸木)と会い、

どこまでも 武蔵野の月影涼し

寸木

水あい似たり 三ツ又の夏

芭蕉

と詠み、今も地藏寺の境内に二春の手によって句碑が建

てられている。

明治の初期までは黒野地域一帯の交通は、陸路よりも中小河川で船を利用することが多かった。三ツ又は交易の拠点として上流の常盤、方県、伊自良の村々の生産物(薪、木材、炭、竹材、農産物)の運搬、さらに幕府へ上納の穀類を遠くは桑名、四日市、大阪までも運ばれたという(美濃誌)。帰り船には、上流の村々への生活必需品を提供していた。こうした交易の街として鶴飼黒野の街はまた栄えた。

三ツ又は、上流へ、下流への出船、入船の検問所も置かれていたと、四ヶ村輪中の記録にも残されている。

城主加藤貞泰が慶長十四年、黒野の発展を図るため正木御坊を移築した折、仮橋が壊れて巨大な庭石が川に落ちて、今も川に雑草も生えぬ場所が天王神社の北側にあると語り伝えられている。

前述した船運交通に利用されていた船については黒

野史誌に記載されているので転記しておくことにする。

「板屋川筋 鵜飼形問船と云い長さ七間二尺、巾五尺七寸、積荷千七百貫、行き先 竹鼻、桑名、津島、名古屋等への往復。

伊自良川筋 方県郡折立、三ツ又より鵜飼形 長さ六間三尺、幅四尺二寸。

交人村荷船伊自良川筋 伊自良川交人問屋橋、方県岩利まで往復、鵜飼形船 長さ五間五尺、積荷二百五十貫

荷船には人の便乗自由ということで、途中に乗船所がいくつあつて、「おい」と手を挙げれば船を止めて乗せてくれたという。昭和八年長良川上流支流の改修が行われて水位が下がり、三ツ又を流れていた三川もそれぞれ独立した川になり、今は昔の面影すら見ることができない。(くろの白寿 第十八号 平成五年二月五日)

黒野白寿会連合会創立五十周年記念誌『五十年のあゆみ』平成二十二年発行より

## 『岐阜県の地名』 日本歴史地名大系21 平凡社 昭和64年(1989)発行

### 「三ツ又は折立村の支郷・芭蕉が訪れた」

岐阜市 522

折立村 おりたてむら 岐阜市折立

黒野村の東に位置し、伊自良川と鳥羽川が合流した且川が東境を流れる。本郷は黒野村に続く北西部にあり、南に遠く支郷三ツ又が位置。慶長郷帳および元和二年(一六一六)の村高領知改帳に村名がみえ、高九〇七石余。正保郷帳では田六九五石余・畑二〇四石余・紙桑木高七石余。初め加藤貞泰(黒野藩領であったとみられるが、慶長一五年(一六一〇)石河光忠の領地となった(徳川家康朱印状写)徳川林政史研究所蔵)。同一七 years 光忠が尾張藩に付属し同藩領となり幕末に至る。支郷三ツ又は明治大学刑事博物館本元禄郷帳に三股村とみえ、本郷とは別に庄屋が置かれていた。明暦覚書によれば概高四一三石余、人数一四〇、馬九。「濃陽志略」では家数七〇・人数二七〇。神社として五靈宮・石神祠・蔵王祠・稻荷祠・神明祠・天王祠、寺として超勝寺(現浄土宗)を記す。同寺の敷地五畝余・大門三畝余(庄屋一代明細記)佐藤文書。「濃州徇行記」では反別田四一町七反余・畑一九町七反余、家数七一・人数三二二、馬一八。用水は黒野村の古城堀水用水に依存し、秣場は黒野村が当村に入会っていた(正徳三年「通水証文」伊藤文書)。三ツ又の浄土宗地藏寺に芭蕉句碑がある。芭蕉が貞享五年(一六八八)三ツ又を訪れた折、神山寸木、尾張の人山本荷兮と連句を作った。元文元年(一七三六)寸木の長男神山二春がこの連句を円筒形の水成岩に表に句、裏に由来を彫ったもので、長く行方不明であったが、昭和三九年(一九六四)に発見され同寺に移された。神山家は三ツ又の庄屋を代々勤めた家である。



## 九、三ツ又の地理今昔

### (一) 川筋の変化

江戸時代の三ツ又周辺河川は、現在の河筋とは大きく違い、板谷川（板屋川）が三ツ又と柿ヶ瀬の間を流れ伊自良川に合流していました。その伊自良からは長良川の分流古々川に合流していました。

### (二) 三ツ又の風情絵



三ツ又の風情画 (18世紀前半に描かれたと推定)  
三ツ又に関する句集『百人一句』より  
神山忠司蔵

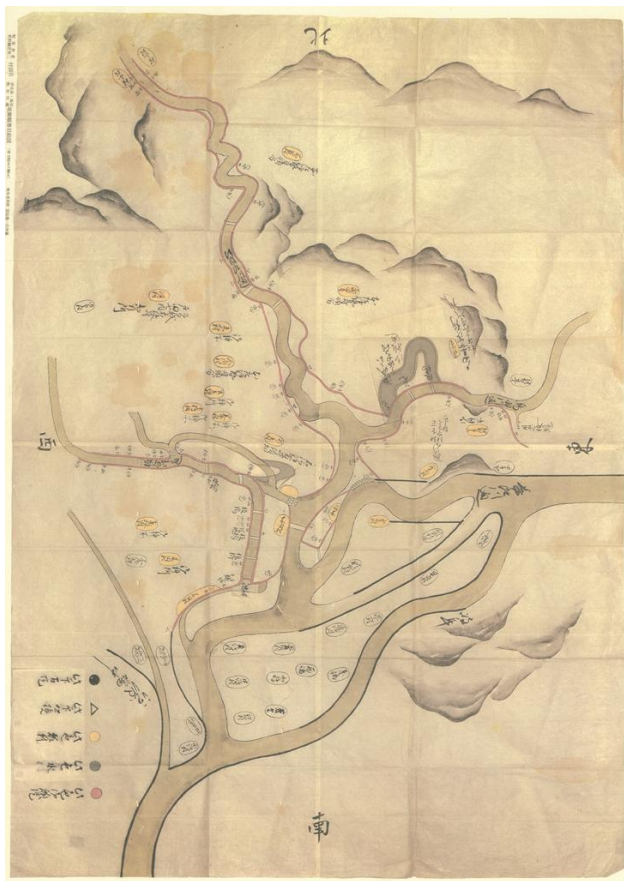
平成29年7月10日に神山忠司氏宅を訪問の節、古文書に描かれていた絵図を発見。川筋と鵜舟の風景には驚きました。

### 絵図の解説（筆者）

- ・ 絵図上方が南方、右が西方。六軒ほどの藁葺き集落が三ツ又村である。
- ・ 鵜を操り篝火を焚いて漁をしている漁師と小舟が描かれ、長閑な情景が浮かぶ。
- ・ 描かれた時期は、二春の父寸木没後の元禄8年（1695）～元文5年（1740）二春没の間と推定する。
- ・ 絵図解析の結果、中央の川が伊自良川（現在の新堀川・旦川）、西側の川は板谷川（板屋川）、東側の川は長良川分流の一つ古々川、左側に川に挟まれた地は西正木村内である。
- ・ 集落の傍が三股地形であるので三ツ又と云う地名が生まれたと考えられる。または古々川の広域も含めて三川を三ツ又と云っていたことも考えられます。
- ・ 伊自良川と古々川の合流カ所は、現在の古川橋の北側付近と推定する。
- ・ 当時の板谷川は三ツ又の南を東へ流れていた。その根拠は、次頁の絵図を参照。



(三)板谷川は三ツ又村の南へ流れていた1



『伊自良・鳥羽・板屋川通 堤御願墨引絵図』  
岐阜市史 資料編近世二 付図6 寛政8年(1796)

以前の板谷川は三ツ又で伊自良川に入る

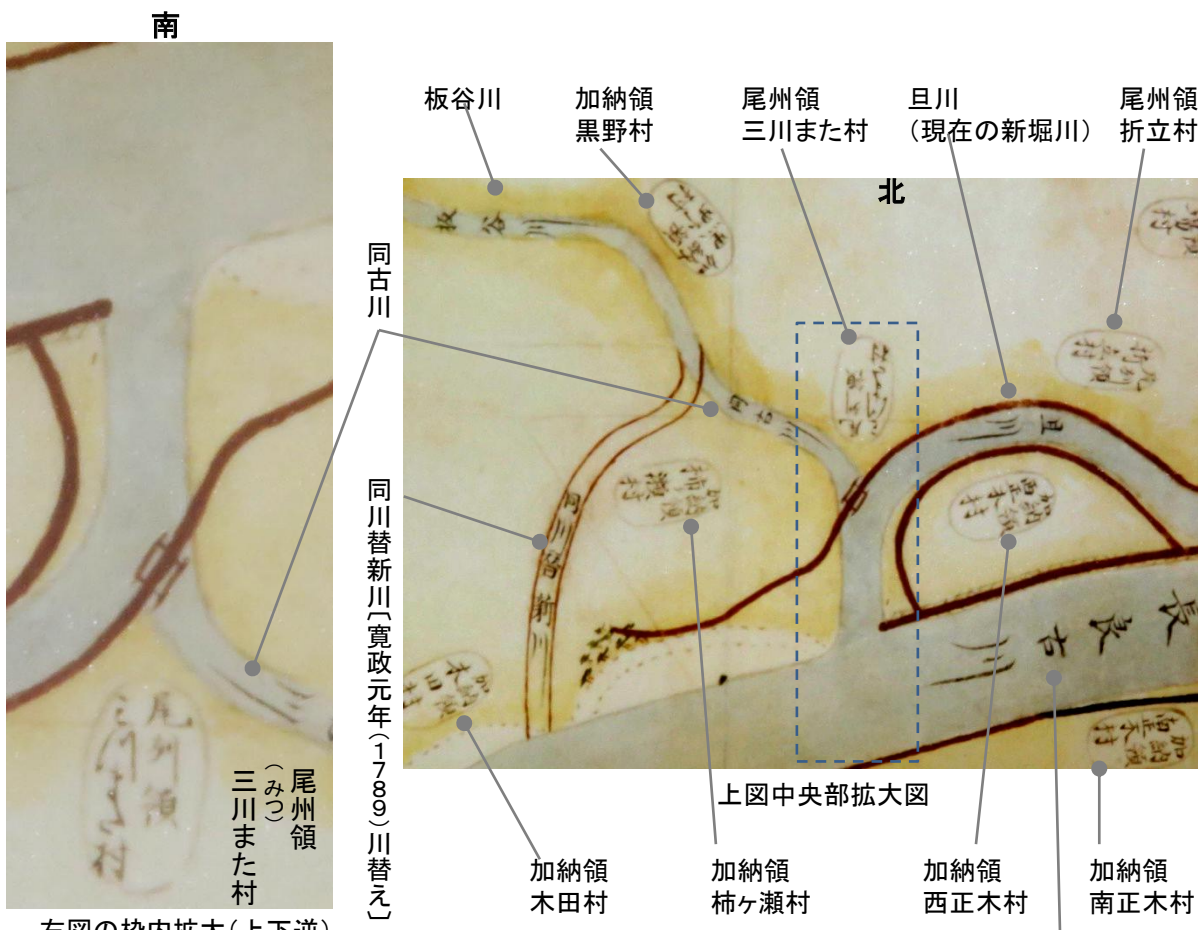


『伊自良・鳥羽・板谷川通 堤御願墨引絵図』(部分) 赤色線は新堤御願の堤防  
岐阜市史 史料編近世二 付図6 寛政8年(1796)頃(貞享5年から約98年後)

(四)板谷川は三ツ又村の南へ流れていた2



『宝永二年(1705)以前以後堤色分絵図』(部分) 天保(1830)～安政(1860)  
岐阜県図書館蔵(写し)・原図は岐阜県歴史資料館蔵



右図の枠内拡大(上下逆)

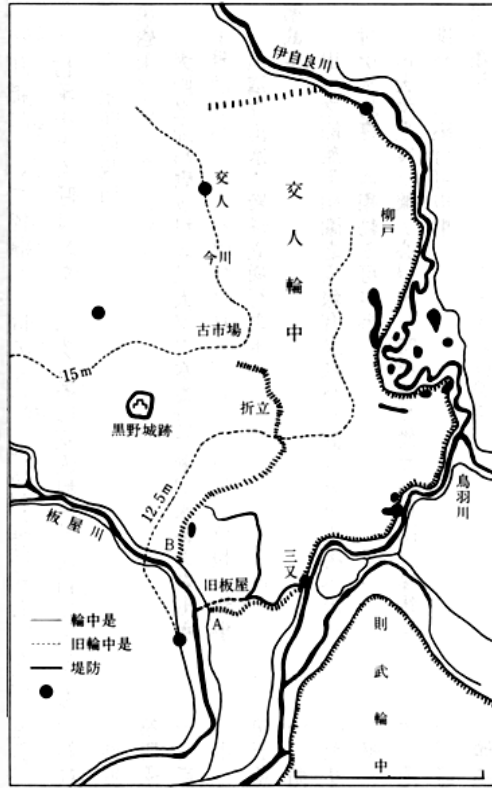
- ・↑上図は前ページの「三ツ又の絵図」とほぼ一致する。
- ・以前は三ツ又の南に板谷川が流れ旦川(伊自良川)に合流していた。
- ・堤は色区分け表示から宝永2年以後に川替で出来た川と堤。

(五)板谷川は三ツ又村の南へ流れていた3

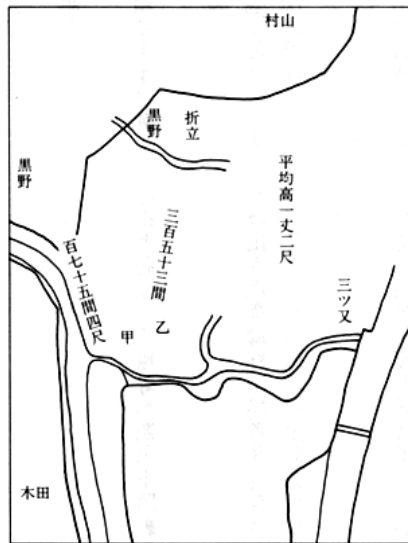
(ウ)、八十間の堤防

現在の八十間のところは無堤で、板谷川は八十間から東へ流れ三又の南で伊自良川に注いでいた。すなわち、交人・今川・古市場・折立村の四ヶ村は西・北・東には堤防があったが、八十間付近が水開場で、いわゆる尻無堤の状態であった。もちろんこの無堤の水開場をふさぎ水害を除去しようとの希望はあったが、ようやく寛政元年(一七八九)

交人輪中概念図 国島原図



八十間堤防の構想 (県立図書館蔵)



となり、水害軽減策として、八十間より板谷川が南流するようお手伝普請で川替ええされ、又三ツ又の南へ流れていた旧川は縮切られたので、水行はこれによりかなりよくなったが、依然として水開場は残り、水害はあとを絶たなかった。

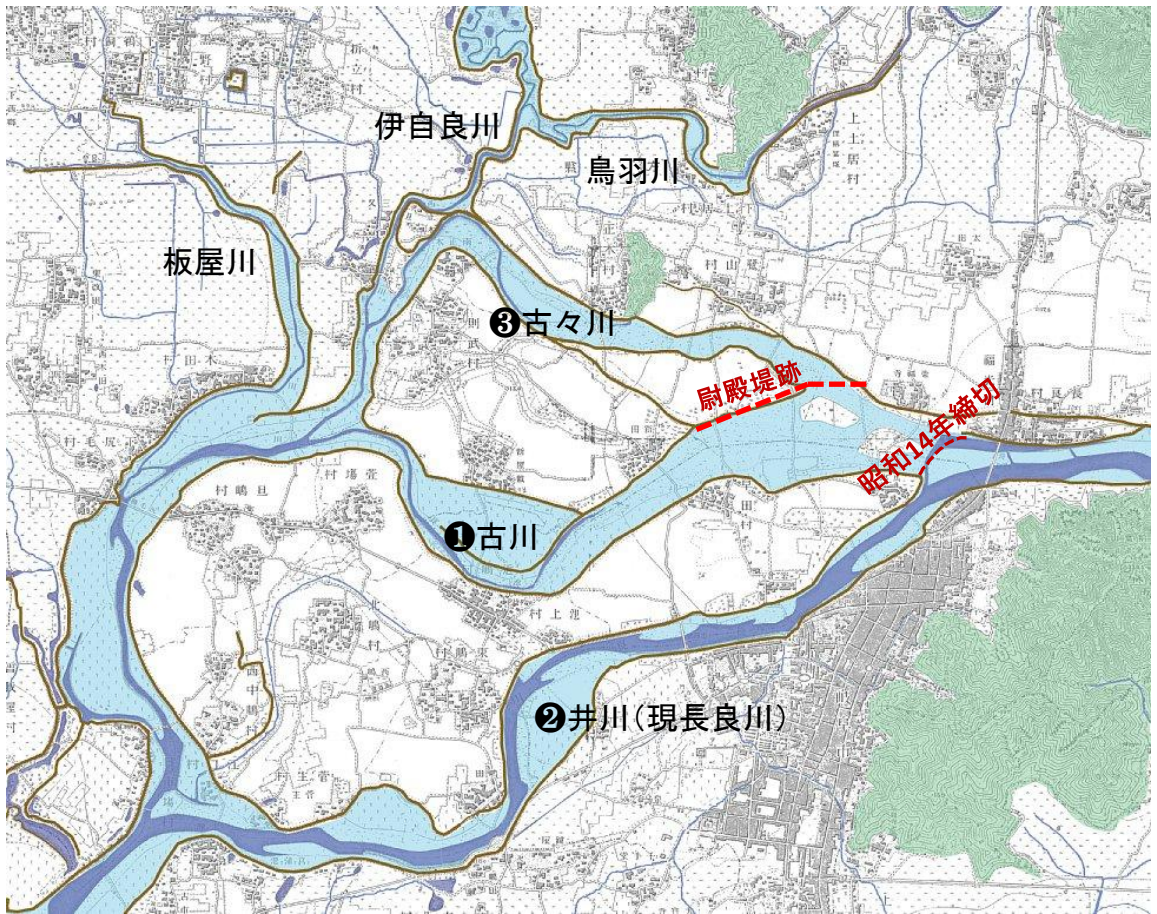
●木田村の記録

寛政元年(1789)の御普請時に板屋川の川替掘割が行われ、木田村本村の南を流れる川につないで、板屋川の水が直接長良古川へ流れ込むようになった。(美濃国方県郡木田村 山田家文書目録6頁)

木田公民館講座「ふるさと木田の歴史と文化」後藤信義氏講演資料より

『黒野史誌』水災対策 交人輪中 八十間の堤防 839頁  
(交人輪中概念図 国島原図とは、国島秀雄氏作成)





『明治24年測量・明治43年発行 大日本帝国陸地測量部 岐阜2万分の1地形図』  
(河川・尉殿堤を推定色塗り 筆者加筆)

長良川は、天文4年(1535)以前は①、天文4年(1535)の大洪水で②が出来る。慶長16年(1611)の大洪水で③が出来る。黒野城主加藤貞泰が築いた「尉殿堤」(じょうどのつつみ)は、慶長15年(1610)米子へ国替えの翌年に大洪水で古々川が貫通する。昭和14年(1939)の古川、古々川の締切完了までは三川が流れていた。

芭蕉が三ツ又の俳句を詠む約七八年前の慶長十五年(1610)には、度重なる洪水で正木坊が流出し、この年に黒野へ移転している。

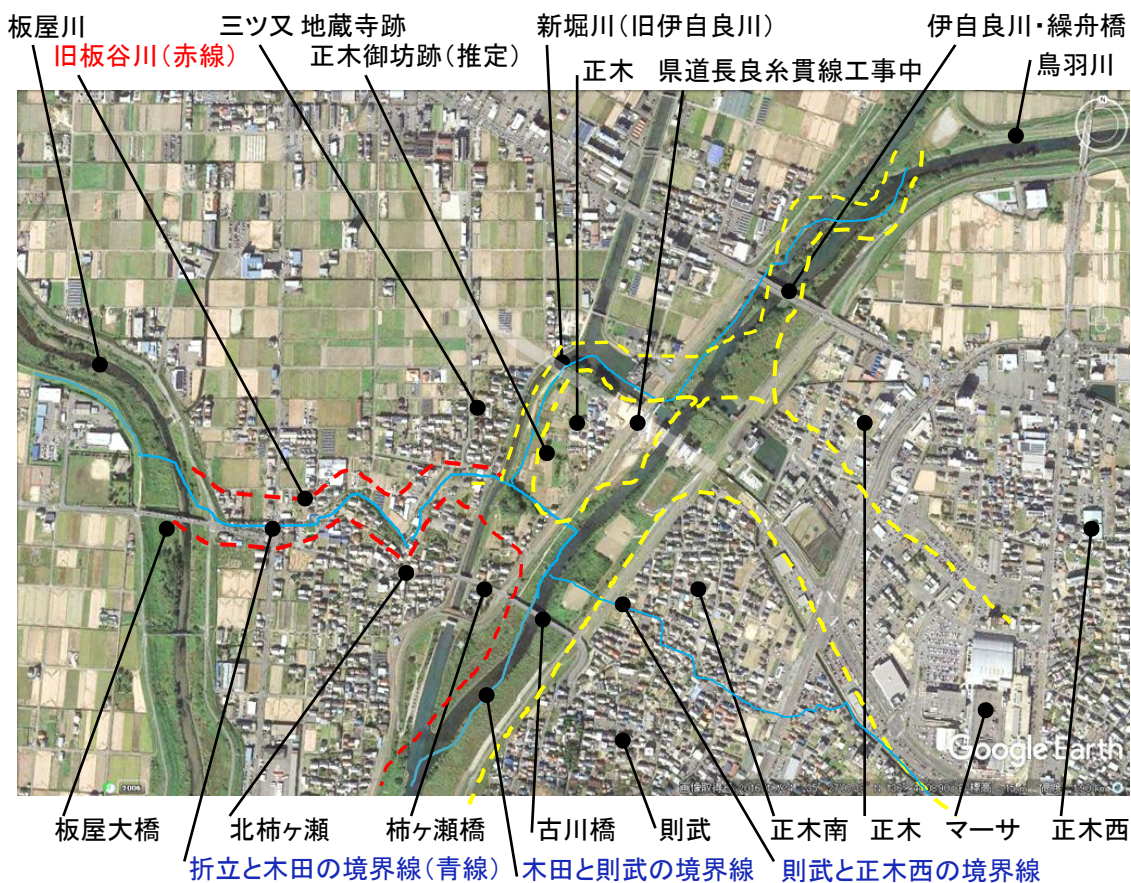


18世紀初旬頃の旦川(伊自良川)・古々川の右岸(筆者推定)

上記図の三ツ又周辺拡大地図



(七) 現在の地形



現在のミツ又周辺 『Google Earth 衛星写真』上に筆者加筆) 破線(黄色)は明治24年の河川

(八) 妙照寺とミツ又へのルート考察

稲葉山(金華山)の麓、芭蕉の旅宿妙照寺から三ツ又神山寸木屋敷までの直線距離は約四キロメートル。寸木や芭蕉らが妙照寺と三ツ又を往復するルートは、陸路では長良川を渡り福光村↓鷺山↓繰舟船↓三ツ又へ。又は井川を渡り早田村↓古川を渡り↓則武村↓古々川を渡り↓三ツ又などが考えられます。六月の季節、舟で移動すれば十八楼辺りから古川又は古々川を下り三ツ又へのルートが考えられます。芭蕉が訪れたと伝わり、江戸時代に各地から多数の俳人が神山家や三ツ又に来遊したのでしよう。



旧板谷川の面影が残る  
柿ヶ瀬側は高くミツ又側は低地



旧板谷川の面影が残る  
新堀川への排水口 ミツ又・木田の境界  
平成29年9月13日筆者撮影

## 十、三ツ又の寸木・芭蕉 関連年表

西暦	年号	月	日	出来事	備考	
1600	慶長	5		岐阜織田秀信が竹中半兵衛屋敷跡を妙勝寺（現在地）に寄進		
			8	関ヶ原合戦前、織田秀信が三ツ又隣接の柿内正木郷寺内（正木御坊）に禁制を立てる		
		15		正木御坊、黒野に移転。加藤貞泰、米子へ国替え。超勝寺二世定山上人本尊と共に米子へ移る。黒野城廃城		
		16	8	12	長良川洪水。長良村崇福寺前、川になる	
1610		16	8	12	長良川洪水。長良村崇福寺前へ分派し、鷺山・則武・正木の諸村を経て木田村に至り且川（伊自良川の下流）に入る（古々川）	「尉殿堤」流失
1611		16	8	12	長良川洪水。長良村崇福寺前へ分派し、鷺山・則武・正木の諸村を経て木田村に至り且川（伊自良川の下流）に入る（古々川）	
1614		19	7			
1640	寛永 年頃	17		超勝寺四代、寺門廃絶のところ檀頭神山長四郎の要請で中興		
1644		21		芭蕉誕生（伊賀上野） 己白・秋芳（妙照寺住職）誕生		
1662	寛文	2		妙照寺本堂建立		
1665		5		各務支考誕生（岐阜市北野）		
1667		7	9	神山吉正（寸木）「玉海集追加」に俳句寄稿		
1684	貞享	1		芭蕉、美濃へ来遊、大垣に滞在 芭蕉41才 越人入門		
1687		4	11	11	名古屋の芭蕉滞在先へ落梧、蕉笠が訪れ「来春、初夏の節、必ずその御地御尋ね申すべく候」と約束	
1688		5	5	中	妙照寺の己白に誘われて妙照寺へ。芭蕉45才 当時の住職は第五世円光院日応大徳（中興の開山）	
				中	芭蕉、岐阜加島の十八楼に上がる。その後大津へ	
		6	5	芭蕉、近江の門人らと歌仙		
			6	芭蕉、大津を出発。中山道愛知川に一泊		
		7	芭蕉、美濃赤坂に一泊			
		8	芭蕉、岐阜到着、妙照寺訪問、賀島氏「十八楼」で鶴飼見物。1ヶ月岐阜に滞在。これを機に岐阜蕉門成立			
		17	寸木（発句）・芭蕉（脇句）・名古屋から荷兮・越人・大垣の落梧・己白（妙照寺僧）と六吟表六句を詠む	岐阜興行2日前		
		18	芭蕉、荷兮・越人も一緒に鶴飼を見物			
19	芭蕉、妙照寺にて「貞享五歳林鐘十九日 於岐阜興行」美濃・尾張の俳人総出の十五吟五十韻俳諧興行					
元禄	7	3	芭蕉、名古屋に移り円頓寺に滞在			
1689	元禄	1	9			
1689		2		芭蕉、「奥の細道」の旅立、大垣で終る		
1690		3	3	各務支考、近江にて初めて芭蕉と対面し蕉門に入る	貞享5年芭蕉来遊から2年後	
1691		4	5	落梧没40才		
1692		5		三ツ又村庄屋 神山長四郎吉正（寸木）の名		
1693		6		日賢上人（俳号 己百・秋芳・宣白）妙照寺第七世住職に就任		
1694		7	10	12	芭蕉没51才 各務支考、芭蕉の臨終を看取る	
1695		8	3	寸木、芭蕉百ヶ日追善に寄稿。8月3日神山長四郎吉正（寸木）没。その子正孝は二春と号し寸木を受け継ぎ俳諧を趣味とした		
1696		9	3	各務支考、芭蕉の三回忌を双林寺（京都市）で営む		
1698		11	11	1	妙照寺住職日賢上人（己白）没55才	
1704	宝永	1		各務支考「国の華」第六 里桜には、発句に「挨拶」と前書きあり、第三までを収め、「是は三侯の何がし、芭蕉翁を岐阜の旅店にたづねて此句申されたるに深川のご郷を思ひ出給ふなるべし」と付記	貞享5年芭蕉来遊から16年後	
1706		3		庄屋神山長四郎正孝（二春）、苗字帯刀許される		
1711	正徳	1				
1716	享保	1	8	25	荷兮没69才	
1731		16	2	7	各務支考、獅子庵で没67才	
1736	元文	1		神山正孝（二春）、寸木が句を差し出すと芭蕉が脇句を添えて下さったので、このことから三ツ又に関する詩歌を収集（句集は「百人一句」）。この大成を機会に寸木・芭蕉の連句と云われを記した碑を建立	貞享5年芭蕉来遊から48年後、父寸木没後32年	
1739		4		越人没年月日不明・83才		
1740		5	11		神山正孝（二春）没	



1751	宝暦	1			
1762		12	12	地藏寺跡入口の地藏 「三ツ又村講中」の刻銘	
1765	明和	2		「詠三川古和歌碑」を神山義正建立(連句碑の右側の円筒碑)	
1766		3		三ツ又庄屋 神山長四郎正伴、祖父正孝(二春)27回忌法要 和歌50首催す。法要手向け詠草集の始めに、「西濃北濃の河筋ひとしく落あひて、南に流るる水のちまた三つに分かれたれば、三ツまたと呼ぶところに、家居せられける神山氏吉正、風雅に志深くして歌枕の旅客などあまた訪ね来る中に、貞享のころほひ武蔵の国より芭蕉といへる翁来リテ遊べる事待りし」(黒野史誌・神山芳雄文書)	貞享5年芭蕉来遊から78年後
1767		4	12	地藏寺境内灯ろう銘「御宝前 神山長四郎」	
1773	安永	2	9	地藏寺境内灯ろう銘「神山長四郎正伴」・「禁葷酒」石碑は「延命山洗心代 神山長四郎正伴」の銘(年代不明)	
1775		4		地藏寺境内 釣鐘の刻年(現在地藏菩薩建屋) 浄土宗 願主徳入	
1778		7	2	地藏寺 武儀郡津保谷より引堂。12月先祖、父母の菩提で1字建立	
1782	天明	2		長四郎正津、道中帯刀・其身一代免許	
1789	寛政	1		板谷川が三ツ又に流れていたが南流出来るように手伝普請で川替え	
1790		2		長四郎正津、其身一代帯刀	
1792		4		長四郎正津、其身一代苗字御免	
1793		5		長四郎正津、宗門自分一札(宗門帳記載にあたって自分の家だけ別冊とすることが許された)	
1794		6		「水月一雙」の士朗の序によれば、桂花楼主人看古が美濃の三俣の里に、寸木の末裔を尋ねたところ、かつて芭蕉が荷兮・越人らと共にそこに来合せた折の「消日の俳諧」(面六句也、貞享五年林鐘十七日荷兮筆)があったので、それを写したものとして巻頭に掲げ、それに士朗・岱青・看古・桂五ら一派の連中が裏以下を継いで一歌仙としている。これによって、六月十七日の興行と知られる。	
1795		7		長四郎倅 弥五左衛門が長四郎の名代であるときは道中帯刀御免	
1806	文化	3	8	庄屋である長四郎が病死で子の神山長四郎正道が庄屋役受けつぐ、弥五左衛門という	
			12	弥五左衛門は其見一代苗字帯刀地廻り御免	
1809		6		宮之丞が道中帯刀御免	
1818		15		長四郎正道の倅長之助が道中帯刀御免	
1820	文政	3		長之助、頭御目見が許される	
1831	天保	2		長四郎、一代苗字帯刀御免・宗門自分一札	
1832				御紋付上下着用認められる	
1837		8		神山家氏寺 地藏寺建て替え	
1899	明治	32		地藏寺、智勝院の末寺となる	長年、碑の存在忘
1900		33		地藏寺と称す	
1959	昭和	34	9	伊勢湾台風の倒木整理で地藏寺境内から芭蕉と刻まれた円筒の石碑発見	元文元年の連句碑建立から223年
1960～		35～38年		以哉派の神山映月(耕一)が連句碑と確認	
1964		39	4 14	獅子門第34世武藤景行が確認、周知に努める碑を訪ね神山映月、武藤景行らと俳諧。当時、句碑は建っていた。但し台座は無かった。	
1965		40	1 17	各務虎雄が台座建立の責任者となる	
			2 10	松尾吾作市長から台座建立ため10万円補助を承諾	
			5 5	台座竣工祝賀会が催された	芭蕉来遊から277年
?		?		國島十雨ノト(客発句、脇亭主の俳句規則から連句は岐阜の旅宿の詠であると記す)	
1983頃		昭和58年頃		岐阜市老人クラブ発行「光」寄稿「芭蕉の句碑」神山悦三(68才) 神山寸木の許を訪れた折と記述	
1987		62	8 1	「黒野史誌」発刊。芭蕉の来濃、神山寸木の項(連句は旅宿で詠まれる、碑文は芭蕉此の家に来遊)	
		64		〔岐阜県の地名〕平凡社発行 折立村の記載に芭蕉が三ツ又を訪れた折、連句を作ったと記載	
2017	平成	29	11 25	連句碑、歌碑の拓本/解説及び調査研究資料発行(研究会)	
			11 29	連句碑が傾斜している為、台座下補強工事(研究会)	
2018		30	3 3	連句碑傍に案内板設置・除幕式(研究会)	芭蕉来遊から330年

# 11. 書籍などに紹介されている連句碑

☆ 「岐阜市の文化」 松尾芭蕉の句碑をめぐる 52頁 岐阜市

## 水相似(みづあひにた)り三またの夏

建立場所 黒野三ツ又 地藏寺  
 建立者 神山二春  
 建立年 元文元年(1736年)

岐阜市北部・黒野三ツ又の地藏寺にある句碑。句は、ここに在住する神山寸木らとの連句の座で詠まれたもので、「どこまでも武蔵野の月影涼し」という神山寸木の発句に付けられた脇句。建立者の神山二春とは、神山寸木の長男にあたる人物。



☆ パンフレット「芭蕉と支考 関連句碑マップ」  
 岐阜市歴史博物館 平成13年2月作成

3  
芭蕉句碑

水相似(みづあひにた)り三またの夏  
 岐阜市黒野三ツ又地藏寺  
 黒野の寸木(俳人)の発句「どこまでも武蔵野の月影涼し」に芭蕉がつけた脇の句。  
 元文元年(一七三六)建立

☆ 「岐阜市漫遊 岐阜市観光情報 観光名所 句碑めぐり」  
**水相似(みづあひにた)り三またの夏**



松尾芭蕉

黒野三ツ又 地藏寺  
 岐阜市北部・黒野三ツ又の地藏寺にある句碑。  
 句は、ここに在住する神山寸木らとの連句の座で詠まれたもので、「どこまでも武蔵野の月影涼し」という神山寸木の発句に付けられた脇句。

☆ 書籍「芭蕉と岐阜・大垣」  
 大野国士著 まつお出版(松尾一)  
 1993年(平成5年)発行 24頁

### 詩心の交流

滞在中、幾つか連句の座が持たれた。  
 六月十七日、黒野の神山寸木、名古屋の荷兮や越人、落梧、己百の六人で、表六句を作っている。

どこまでも武蔵野の月影涼し  
 水相(みづあひ)にたり三またの夏  
 (下略)

寸木  
 芭蕉

武蔵野の果まで照りわたる月光は、芭蕉の寓意でもあるのか。芭蕉は、寸木の住む黒野三侯と芭蕉庵のある深川三股との間の地形的類似性を指摘することによって、挨拶を返している。

☆ 書籍「石に刻まれた芭蕉」  
 全国の芭蕉句碑3230基 弘中 孝 著  
 2004年(平成16年)発行

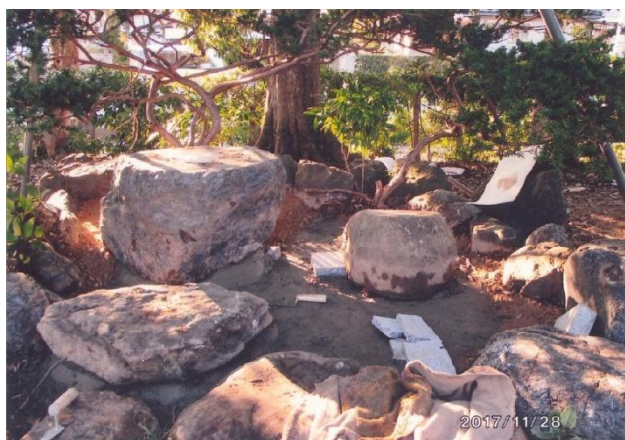
【句碑】 55×21(円柱状)  
 (連句)  
 貞享五林鐘十七日芭蕉尊翁来遊  
 岐阜市星野三ツ又  
 地藏寺 跡  
 元文元年(一七三六)六月  
 神山二春 建立  
 神山二春 書

どこまでも武蔵野の月影涼し 寸木  
 水相似(みづあひ)にたり三またの夏 芭蕉

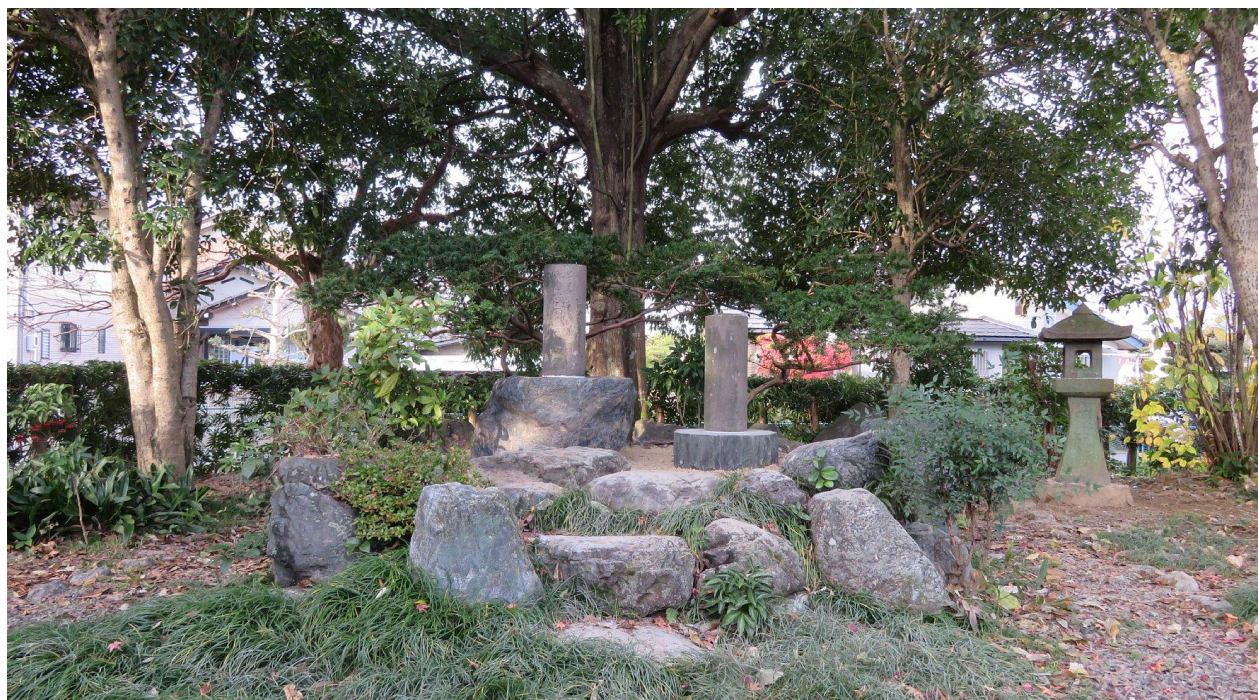


## 十二、句碑保存活動（台座補強工事）

昭和四十年（1965）五月五日の台座竣工祝賀会以来、五二年の歳月が経過し、句碑が傾いてきた為、句碑の保存を目的に研究会は地主の超勝寺様と三ツ又自治会の関係者に許可を得て、徳風院石碑の河合氏に台座下部の補強工事を発注。平成二十九年（2017）十一月二十八日、二九日工事完了。



土台はコンクリート厚さ約25cm×80cm×140cm補強入り  
碑は台座に接着 撮影 関谷太治氏



台座補強工事後の寸木・芭蕉の連句碑(左) 三川を詠んだ古和歌の碑(右)  
平成29年12月6日筆者撮影

## 十三、まとめ

連句が詠まれてから四八年後に碑が建立された。碑文には寸木の子二春は、芭蕉が三ツ又の父寸木の屋敷に来遊して句を呈したと記しています。

「水月一双」寛政六年（1794）の士朗の序文によると、桂花楼主人が三侯の里を訪ね、芭蕉の旅の宿となった寸木の末裔の家に、かつて芭蕉が荷兮らと共にそこに来合わせた折の「消日の俳諧」（荷兮筆・面六句）を写しています。その一次文書である「消日の俳諧」の存在と神山家に芭蕉が来たという証しが不明です。

獅子門第二世の各務支考『国の花』は、連句が詠まれた十六年後の刊行。「挨拶」として「是は三侯の何がし芭蕉翁を岐阜の旅にたづねて起句此申されたるに深川の古郷を思ひ出給ふなるべし」と記載。

同じく第三九世國島十雨は、連句の規則上、発句は客が、脇句は亭主の順で詠むものであるとして、芭蕉の旅宿で詠まれたものであると解釈されています。

碑文以外の史料では、芭蕉が三ツ又に来た証しが見つかっていないので、来遊しているのかどうかは明らかではありません。

芭蕉さんは全国を旅し、自身の目で見て感じたことを俳句で表現する俳人。初対面に近い寸木との面識の中で、はたして行ったことも見たこともない岐阜の三ツ又について「水あひ似たり三またの夏」と詠んだのでしょうか。

連句のルール通りであれば、寸木の屋敷を訪ねた後に、旅宿で詠んだ可能性も考えられます。

まとめとして、「三ツ又と旅宿の妙照寺どちらで詠んだのか？」は断定することはできませんでした。いずれにせよ、芭蕉が美濃三ツ又の情景を詠んだことには間違いありません。

十雨のことば（國島十雨ノート）にあるように

「さて芭蕉という俳諧の大家の作品が三ツ又の里に存在することは文化的に見て素晴らしい事である。私はこのような句を残して下さった神山寸木という大先輩がある事を誇りとすると共に、この地の人々も誇りとして貰いたいと思うのである」  
の言葉を引用してまとめとします。

尚、芭蕉・寸木の後の神山家文書には、三ツ又の地名、川、自然、鵜舟や風景を題材にした俳句・歌などが多く収載されており、遠方からの訪問者も多数見られ、川の文化が続いてきました。

岐阜市北西部には、芭蕉、支考の後、以哉派第五世安田以哉坊（黒野）や、十八世田中専雅（小野）、二九世山田三秋（西郷）、三九世國島十雨（古市場）と多数の道統を輩出し、多くの門下生も俳句に親しみ、たいへん文化豊かな土地柄でもありました。

そもそも時代を遡れば、加藤貞泰が古々川を堰き止めるため築いた尉殿堤が、慶長十五年（1610）国替え二年後の慶長十七年に長良川洪水で流失し、伊自良川へ貫通して古々川が生まれたといえます。伊自良川・板屋川の三川が合流した付近が三ツ又の地名。それから七四年を経て、芭蕉の句も生まれました。  
川と水に関わるこの地域の歴史文化を後世に残したいものであります。

引用参考文献・資料（順不同）

- ・『黒野史誌』
- ・『校本 芭蕉全集』第四卷 連句編(中) 富士見書房
- ・『國島十雨ノート』三股芭蕉翁遊句碑について（増田悦治Ⅱ写蔵）
- ・『鷺山史誌』
- ・『教区誌』―浄土宗岐阜教区（超勝寺・地藏寺）
- ・『超勝寺の沿革』第21世 道譽信互
- ・大野国士著『芭蕉と岐阜・大垣』まっお出版
- ・岐阜市老人クラブ連合会『光』351頁「芭蕉の句碑」 増田悦三記
- ・東海俳句懇話会『笹』（身近にあった俳聖芭蕉の足跡） 栗田俊治記
- ・地藏寺跡写真（平成18年）提供 増田光夫
- ・ウエブ『岐阜県 松尾芭蕉の句碑巡り』
- ・神山二春『百人一句』神山忠司氏蔵
- ・『新編 芭蕉大成』連句編219頁 三省堂
- ・『国書総目録』第五卷 昭和42年 岩波書店
- ・『俳諧雑録』（中村俊定文庫）早稲田大学古典籍総合データベース
- ・『国の花』各務支考 岐阜県図書館蔵
- ・『蕉門俳諧集二 古典俳文学大系7』集英社
- ・『超勝寺の沿革』第21世 道譽信互
- ・『當山の概略』妙照寺リーフレット
- ・水野耕嗣著『岐阜・妙勝寺に関する建築的考察』岐阜専紀要第31号
- ・安原貞室編『玉海集追加』早稲田大学古典籍総合データベース
- ・『くろの女』黒野女性史研究会
- ・『國島五作「ふるさと黒野」黒野白寿会連合会創立五十周年記念誌
- ・『五十年のあゆみ』（くろの白寿）第18号 平成五年）
- ・『角川日本地名大辞典』21岐阜県 角川書店
- ・『岐阜県の地名』日本歴史地名大系21 平凡社
- ・『濃飛河川資料2』岐阜県郷土史料協議会
- ・『伊自良・鳥羽・板屋川通 堤御願墨引絵図』寛政八年（岐阜市史資料編近世二付図6）
- ・『方県郡木田村 山田家文書』木田公民館講座「ふるさと木田の歴史と文化」後藤信義講演資料
- ・『宝永二年以前以後堤色分絵図』岐阜県図書館蔵（写）岐阜県歴史資料館蔵
- ・『明治24年測量・同43年発行 大日本帝国陸地測量部 岐阜地図』
- ・『グーグルアース衛星写真』

- ・開館15周年記念特別展『芭蕉と支考』岐阜市歴史博物館
- ・パンフ『芭蕉と支考 関連句碑マップ』岐阜市歴史博物館 平成13年
- ・『岐阜市の文化』松尾芭蕉の句碑をめぐる 52頁 岐阜市
- ・散策ガイド『金華山と岐阜の街』まっお出版
- ・『岐阜市漫遊 岐阜市観光情報 観光名所 句碑めぐり』
- ・弘中孝著 書籍『石に刻まれた芭蕉』全国の芭蕉句碑3230基
- ・二〇〇四年（平成16年）発行

○調査研究ご協力者

謝辞

平成二十八年秋から調査研究を始め、資料提供、解説、聞き取りなどで皆様にお世話になりました。特に寛真理子様には、史料紹介、解説でご指導を頂きました。おかげさまで、芭蕉・寸木の俳句と三ツ又に関する歴史の一端を十分ではありませんが紐解くことが出来ました。皆様に感謝を申し上げます。

（敬称略・順不同）

- 神山 忠司
- 超勝寺 第二十一世 道譽信互住職
- 増田 光夫
- 神山 与志子
- 郷 和彦
- 妙照寺 第三十世 堀智仙住職
- 郷 孝夫
- 國島 京子
- 神山 順子
- 佐部利 浩
- 名知 勲
- 関谷 太治
- 望月 良親
- 寛真理子

本書は、地域の事業者、企業などの寄付金にて発行しました。

## 三ツ又を詠んだ俳句

### 『芭蕉・神山寸木連句碑』調査研究

初版発行 平成二十九年（2017）十一月二十五日

第二版発行 平成三十年（2018）三月三日

発行者 黒野城と加藤貞泰公研究会

作成 研究会会長 河口耕三

岐阜市今川四六四・三

☎ 090・1786・6564

メール kuzozo301@yahoo.co.jp



